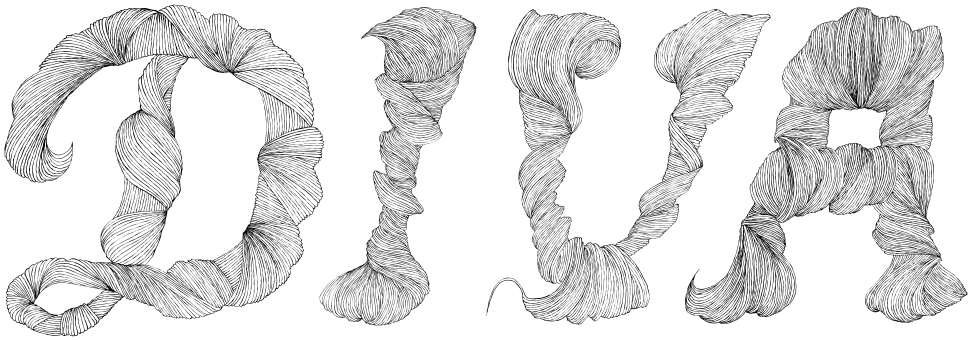

V&A
Created by the V&A – touring the world
プレスリリース
私を動かす、その歌声
DIVA
ディーヴァ展
2027.3.24 WED – 7.19 MON
国立新美術館
企画展示室 2E（東京都港区六本木 7-22-2）
The National Art Center, Tokyo / Special Exhibition Gallery 2E
新
20TH Anniversary



ディーヴァ展

私を動かす、その歌声

展覧会概要

2027年3月24日より、国立新美術館において「ディーヴァ展」を開催します。
本展は英国ロンドンのヴィクトリア＆アルバート博物館（V&A）が企画し2023年に同館で開催されました。その後世界5カ国を巡回し、各地で大きな反響と話題を呼んだ展覧会が、アジアで唯一、そして最後の開催地である東京で、日本展のみの展示作品を加え、そのフィナーレを飾ります。

その歌声で世界を魅了し、時代を動かしてきたディーヴァ

本展は、19世紀から現代にいたるディーヴァの歴史とその概念の変遷をたどり、その圧倒的な創造性、社会的な影響力、文化的意義を考察する展覧会です。
彼らの歌声、表現、そして揺るぎない信念は、ファッションやアート、デザインはもとより、ジェンダーの平等、社会にまで大きな影響を与え、多くの人々に勇気とインスピレーションをもたらしてきました。
オペラ、舞台、映画、ポピュラー・ミュージックの世界で活躍する約100 名の歌手・パフォーマーたちを紹介し、ディーヴァたちの軌跡を通して、彼らが既成概念や偏見に挑み、自らの声と表現によって新たな時代を切り拓くことで、多くの人々を勇気づけていったその歩みを紹介します。

表紙｜「椿姫」でヴィオレッタ役を演じるマリア・カラス（1958年）（部分）
Houston Rogers © Victoria and Albert Museum, London

HIGHLIGHTS

本展のみどころ

1

V&Aならではのキュレーションと日本展独自の特別展示

日本初公開の貴重な衣装や展示作品の数々、日本展ならではの新たな魅力も

ロンドンのV&Aが企画・制作した本展では、V&Aの所蔵品に加えて個人蔵の貴重な衣装や資料、約280点を展示します。
マリア・カラス、マリリン・モンロー、アデル、レディー・ガガ、エルトン・ジョン、リアーナ、ビョークをはじめとするディーヴァが印象に残るシーンで実際に身に着けた約60点の貴重な衣装を中心に、写真、映像、雑誌、ポスター、LP、さらには、ディーヴァたちをモデルに制作された版画作品など、多彩な作品を通して100名にのぼるディーヴァの世界を描き出します。また、日本展独自の特別展示として、日本を代表するディーヴァである美輪明宏を紹介します。



V&Aの「ディーヴァ」展の展示風景
© Victoria and Albert Museum, London

〈貴重な展示作品〉

初期ディーヴァの姿を伝える、希少な作品

- ハリウッド・ヘリテージ美術館所蔵、クララ・ボウが映画「ワイルド・パーティー」(1929年)で着用したドレス(現存が確認されている唯一の衣装で、アメリカ国外ではめったに公開されないもの)
- ジェニー・リンドに贈られたパピエマシェの箱(1848年に病院支援のために行ったチャリティ・コンサートへの謝意として贈られたもの)

伝説的パフォーマーのキャリアの節目を刻む衣装

- マリア・カラスがロイヤル・オペラ・ハウスでの初出演作「ノルマ」(1952年)と晩年の出演作「トスカ」(1964年)で着用した衣装
- マリリン・モンローが映画「お熱いのがお好き」で着用した黒のフリンジドレス

バレエ・オペラ史を彩る衣装

- タマラ・カルサヴィナがバレエ・リュス「ラ・カンティニエール」で着用した衣装
- ジェシー・ノーマンがロイヤル・オペラ・ハウス「ナクソス島のアリアドネ」のアリアドネ役で着用した衣装

著名デザイナーが手がけた衣装

- エルトン・ジョンが50歳の誕生日パーティーで着用した衣装(サンディ・パウエルによるデザイン)
- シェールの衣装群(ボブ・マッキーによるデザイン。第1回ロック・ミュージック・アワードで着用した煌びやかなツーピースを含む)
- ジョイス・ディドナートの赤いサテンドレス(ヴィヴィアン・ウェストウッドによるデザイン)
- ビョークがアイスランドのレイキャヴィークでの公演(2021年)で着用したガウン(メゾン ヴァレンティノによるデザイン)
- リアーナがメット・ガラ(2018年)で着用した衣装(ジョン・ガリアーノ/メゾン・マルジェラによるデザイン)
- レディー・ガガがゴールデン・グローブ賞授賞式(2019年)で着用したガウン(メゾン ヴァレンティノによるデザイン)

衣装に込めたメッセージと自己表現

- ジャネール・モネイがミュージックヴィデオ「PYNK」で着用した女性器をモチーフとしたパンツ
- リゾのボリュームのあるケープとメッセージ入りのサッシュ(ヴィクター&ロルフによるデザイン)
- ビリー・アイリッシュがグラストンベリー・フェスティバル(2019年)で着用したアンサンブル(ステラ・マッカートニーによるデザイン)
- プリンスのためにデザインされ、本人が着用したステージシューズ

HIGHLIGHTS

本展のみどころ

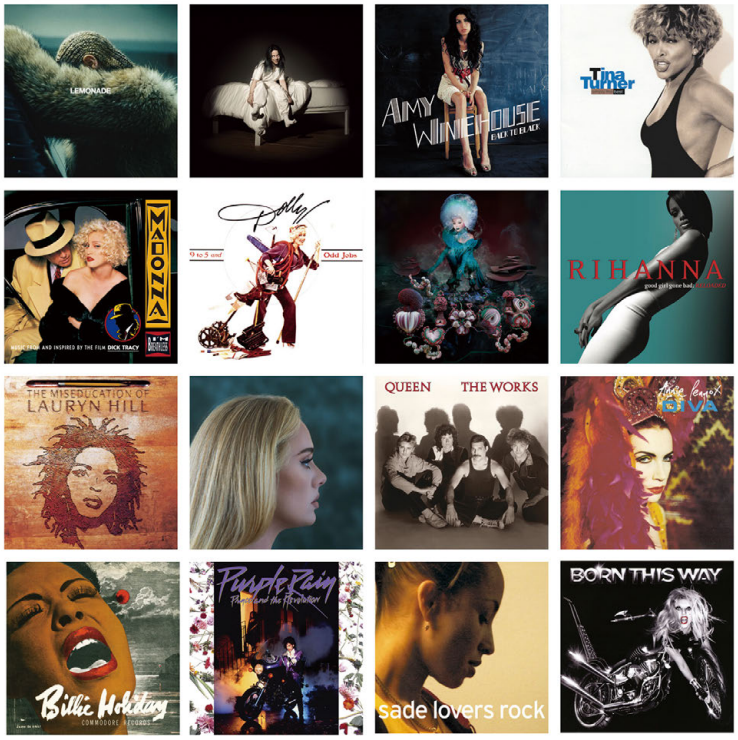
2 舞台芸術、映画、ポピュラー・ミュージックの200年にわたる歴史をフェミニズムの視点を加えて検証

ディーヴァという存在の変遷を多角的に見つめる画期的な展覧会

ディーヴァたちがいかに圧倒的な創造性と表現力で文化に影響を与えてきたか。家父長制を規範とする男性中心の社会の中で、女性やクィアの歌手・パフォーマーたちが自己表現を通して、いかにして主体性を獲得し、既存の価値観や偏見に挑み続けてきたのかを見つめます。さらに、「ディーヴァ」という言葉の意味が歴史の中でどのように展開し、時代を超えて受け継がれていったのかを検証します。

3 ディーヴァの「歌声」に包まれる特別な鑑賞体験

本展では、ディーヴァたちの音楽や映像とともに展示空間を巡る演出によって、それぞれの時代を象徴するディーヴァたちの存在感や創造のエネルギーを体感できます。展示作品を一つひとつ見るだけでは得られない、その時代の空気や熱量まで感じられることも本展ならではの魅力です。



ビヨンセ「レモネード」①
ビリー・アイリッシュ「ホエン・ウィ・オール・フォール・アスリープ、ホエア・ドゥ・ウィ・ゴー？」②
エイミー・ワインハウス「バック・トゥ・ブラック」②
ティナ・ターナー「シンプリー・ザ・ベスト」③
マドンナ「アイム・ブレスレス」③
ドリー・パートン「ナイン・トゥ・ファイブ・アンド・オッド・ジョブズ」①
ビョーク「フォソーラ」④
リアーナ「グッド・ガール・ゴーン・バッド」②
ローリン・ヒル「ミスエデュケーション」①
アデル「30」①
クイーン「ザ・ワークス」①
アニー・レノックス「ディーバ」①
ビリー・ホリデイ「奇妙な果実」②
プリンス「パープル・レイン」③
シャーデー「ラヴァーズ・ロック」①
レディー・ガガ「ボーン・ディス・ウェイ」②

ジャケット写真提供：①株式会社ソニー・ミュージックレーベルズ　②ユニバーサル ミュージック合同会社　③ワーナーミュージック・ジャパン　④BIG NOTHING

EXHIBITION STRUCTURE

展覧会構成

DIVA

私を動かす、その歌声

第1幕

ディーヴァの誕生



「椿姫」でヴィオレッタ役を演じるマリア・カラス（1958年）
Houston Rogers ©Victoria and Albert Museum, London

19世紀のオペラ界の歌姫から20世紀のショービジネス界で活躍した俳優、パフォーマー、さらに主役を担ったプリマドンナに目を向け、「ディーヴァ」という言葉が指す対象とイメージの変遷をたどります。

第1章

清らかな女神：初期のプリマドンナ



1848年12月28日に催されたクイーンズ・カレッジ病院（バーミンガム）を支援するチャリティ・コンサートの際にジェニー・リンドに贈られたジェネンズ&ベトリッジ製パピエマシェの箱（螺鈿象嵌・彩色画付）
© Victoria and Albert Museum, London

「清らかな女神（Casta Diva）」とは、ヴィンチェンツォ・ベッリーニ作曲のオペラ「ノルマ（Norma）」に登場する有名なアリアの冒頭の言葉です。19世紀のヨーロッパのオペラ界では、主役のプリマドンナたちが大衆的な人気を博すようになります。アデリーナ・パッティ（1843−1919年）に代表されるディーヴァたちは、国際的に活躍して名声を得ることによって当時の女性としては珍しく経済的な自立を獲得することができたのです。一方で、この時代、紙媒体を主とするメディア空間の発展に伴い「ディーヴァ」のイメージが社会に広がっていきました。注目を集めるにしたがって、彼女たちは公的なイメージと本来の自分らしさとの間で折り合いをつけなければならなかったのです。

第2章

ヴィクトリア朝時代の舞台のヒロイン

ヴィクトリア朝時代（1837−1901年）の英国のエンターテインメント業界は、他の国と同様に男性によって支配されていました。多くの女性が仕事や教育の現場から排除されていた中で、オペラ歌手同様に、俳優として舞台に立つことは経済的自立と力を手に入れることを意味していたのです。エレン・テリー（1847−1928年）やヴェスタ・ティリー（1864−1952年）は、伝統的な女性像を打ち破り、後世に影響を与えました。また、フランス人俳優のサラ・ベルナール（1844−1923年）は、大胆で表現豊かな演技でヨーロッパのみならず、アメリカでも人気を博し、後世にわたって多くの人々にインスピレーションを与えました。また、ロンドンのミュージックホールで活躍したマリー・ロイド（1870−1922年）は、女性労働者たちの権利獲得のために闘ったのです。



ルネサンス劇場（パリ）で上演されたサラ・ベルナール主演の「ジスモンダ」のポスター、デザイン：アルフォンス・ミュシャ（1895年）
© Victoria and Albert Museum, London

第3章

ダンサーとショーガール

20世紀の到来とともに、独自の身体表現によって国際的な名声を得る女性パフォーマーたちが注目を浴びるようになっていきます。クラシック・バレエからバーレスクに至るまで人々を夢中にさせるダンスや娯楽は、女性たちに踊り手として生きていく選択肢を与えました。一方で、女性に慎ましさが求められた時代において、自らの身体の魅力を存分に発揮する女性パフォーマーたちはオペラや演劇の世界で活躍する女性たちよりも低く見られることがありました。そうした中、イサドラ・ダンカン（1877−1927年）のような舞踊家は女性たちの解放のために活動し、また、ジョセフィン・ベイカー（1906−75年）は人種、および性差別に関する人々の闘いに大きな影響を与えました。

第4章

サイレントの女神たち

サイレント映画が普及すると、舞台で活躍していた女性の俳優たちは映画産業に進出し、中心的な役割を担うようになりました。しかし、多くの場合、作品は男性によって作られたため、女性たちはしばしば型にはまった役(娼婦や誰かの恋人など)を演じざるをえなかったのです。映画では実際の声を出せないにもかかわらず、草分け的な存在のスターたちはその個性的な装いと振る舞いでジェンダーの規範を超え、女性に対する認識の変化を促しました。そして、ロイス・ウェバー（1897−1939年）やメアリー・ピックフォード（1892−1979年）に代表されるように、一部の女性たちは、監督やプロデューサーとして自立したキャリアを切り拓いていきました。

第5章

ハリウッドのディーヴァ



*1

1920年代後半、音声付きのいわゆる「トーキー映画」が登場すると、ハリウッドは圧倒的な存在感のある新しい才能を歓迎するようになります。しかし、多くの場合、撮影現場では女性の俳優たちは相手役の男性俳優よりも劣っていると見なされていました。そうした中で、ベティ・デイヴィス（1908−89年）は、映画界における不当な扱いと闘い、自らの主体性を維持したのです。こうした現状を打破しようとする俳優たちは、次第に周囲から「ディーヴァ」と呼ばれようになり、そこにはネガティヴな意味がこめられ、気難しく、男性たちからは「扱いにくい」と評されるようになっていきます。また、このハリウッドの黄金期において、映画スタジオは徐々にスターの私生活に介入し、ゴシップ雑誌はそのプライベートを執拗に詮索するようになります。そして、マリリン・モンロー（1926−62年）をはじめとするスターたちは精神的にも追い詰められていったのです。

第6章

比類なき歌姫

「ディーヴァ」という言葉がジャンルを横断して用いられていく中で、その言葉は、「椿姫」や「ノルマ」のようなオペラ作品では、マリア・カラス（1923−77年）やジョーン・サザーランド（1926−2010年）など、タイトルロールを演じる歌姫と密接な関係を持ち続けています。オペラハウスは現在も歌姫たちのスケジュールに合わせて各プログラムを組んでおり、圧倒的な歌唱力を発揮して、比類なき存在感を放つアーティストたちは、オペラの主役を演じるごとに「ディーヴァ」という概念を再解釈し、その意味を更新しているのです。

*1
映画「お熱いのがお好き」のシュガー・ケーン・コワルチク役を演じるマリリン・モンローが着用した衣装
デザイン：オリー＝ケリー（1959年）
© Victoria and Albert Museum, London

EXHIBITION STRUCTURE

展覧会構成

DIVA

私を動かす、その歌声

第2幕

ディーヴァの再生・復活



ドルリー・レーン王立劇場（ロンドン）のステージに立つグレイス・ジョーンズ（1981年10月10日）
Photograph @ David Corio

1960年代の第2波フェミニズムの展開を起点とし、公民権運動から現代にいたる時間軸の中で、ディーヴァたちの変遷をたどり、その活躍が性や人種に関する社会的な解放と多様な生き方の承認をめぐる闘いに、いかに貢献してきたのかを紹介します。

※第2波フェミニズムとは、女性参政権の獲得を目指した第1波フェミニズムに続き、「個人的なことは政治的なこと」というスローガンのもとに、社会構造における男女の不平等、不公平を解消しようとする運動です。



ビヨンセが着用したヘッドピース、デザイン：ヴィッキサージュ（2011年）
© Victoria and Albert Museum, London

1

世界を動かす / RUN THE WORLD

1960年代以降の第2波フェミニズムにおいては、女性が置かれている社会構造に対する疑問が呈され、変革を求める声が世界中で高まっていきました。女性パフォーマーたちが搾取されてきた音楽業界においても、女性の経済的な自立は大きな課題のひとつでした。そんな中、バーブラ・ストライサンド（1942年生まれ）は、男性優位のスタジオ・システムに立ち向かい、現代においては、ビヨンセ（1981年生まれ）やアデル（1988年生まれ）のような世界的なスーパースターが音楽業界を切り拓き、芸術的にも経済的にも成功を収めることでこの闘いを続けています。また、リアーナ（1988年生まれ）は、ビジネスの世界にも進出し、自分のパブリックイメージとキャリアをコントロールしているのです。

※ Run the World は、ビヨンセが2011年に発表した Run the World (Girls)に由来。

2

自由への旅立ち / I WANT TO BREAK FREE

フレディ・マーキュリー（1946−91年）、グレイス・ジョーンズ（1948年生まれ）、ジャネール・モネイ（1985年生まれ）など、1970年代以降のポップ・ミュージックの世界で活躍する先駆的なディーヴァたちは、圧倒的なパフォーマンスで異性愛中心主義やジェンダー規範から自らを解放してきました。これらのアーティストたちは、音楽、歌詞、コスチュームで実験的な試みを行い、デザイナーや他のミュージシャンと協働し、障壁を打ち砕くような表現を創り出しています。非常に自信に満ちたディーヴァたちは、自分のオリジナリティをたたえることを恐れず、圧倒的な存在感を発揮しています。

※ I Want to Break Freeは、クイーンが1984年に発表した楽曲名。



グレイス・ジョーンズが着用したビスチェ、デザイン：イッセイ・ミヤケ、V&Aの「ディーヴァ」展の展示風景
© Victoria and Albert Museum, London



ジャネール・モネイがミュージックヴィデオ「PYNK」で着用した衣装、V&Aの「ディーヴァ」展の展示風景
© Victoria and Albert Museum, London



プリンスが着用した靴
© Victoria and Albert Museum, London

3

バックラッシュブルース / BACKLASH BLUES

1950年代から60年代にかけての公民権運動の時代に、エラ・フィッツジェラルド（1917−96年）やニーナ・シモン（1933−2003年）などは、その圧倒的な影響力によって人種差別をなくすための闘いに大きな貢献をしました。また、アレサ・フランクリン（1942−2018年）やジョーン・バエズ（1941年生まれ）のようなアーティストたちは、現状に異議を唱え、観客に不正や偏見について考えるよう促すために長きにわたってキャリアと名声を賭けて歌い続けてきました。そして、現代においても、多くのディーヴァたちは人種やセクシュアリティをめぐる差別に抵抗し、多くの人々の権利獲得のために声を上げ続けているのです。

※ Backlash Bluesは、ニーナ・シモンが1967年に発表した楽曲名。

4

孤独の中で / ALL BY MYSELF

ディーヴァであることはパワフルであると同時に、孤独の中で生きることも意味します。そうしたパフォーマーたちは、その創造性をサポートするプロフェッショナルなチームに囲まれていますが、本人だけがステージに立ち、聴衆に歌を届けることができるのです。ディーヴァたちが名声と成功で世界中のファンを鼓舞する一方で、観客やメディアがその私生活に対する好奇心を抱き、そのプライバシーは損なわれてきました。エディット・ピアフ（1915−63年）、ホイットニー・ヒューストン（1963−2012年）、エイミー・ワインハウス（1983−2011年）など、若くして成功を収めたディーヴァたちの中には、社会的な期待と過酷な境遇の中でドラッグやアルコールに依存し、若くしてこの世を去っている者もいます。そのため、現代のディーヴァたちの多くは私生活とパブリックイメージの両方を管理しようと努めているのです。

※All By Myselfは、エリック・カルメンが1975年に発表した楽曲名。



グラミー賞授賞式（1994年）でホイットニー・ヒューストンが着用したドレス、V&Aの「ディーヴァ」展の展示風景

© Victoria and Albert Museum, London

5

自分を表現する / EXPRESS YOURSELF

「ディーヴァ」という概念は、オペラのみならず、現代においてあらゆるジャンルのパワフルなアーティストに当てはまる言葉として認知されています。例えば、ジャニス・ジョプリン（1943−70年）やミッシー・エリオット（1971年生まれ）のようなダイナミックな歌手たちは、痛烈で、しばしば挑発的な歌と先駆的な芸術的ヴィジョンで聴衆に衝撃を与え、魅了してきました。また、マドンナ（1958年生まれ）、ビョーク（1965年生まれ）、レディー・ガガ（1986年生まれ）のようなアーティストたちは、常に自分たちの芸術性を再構築し、変貌させる能力で尊敬を集めています。華やかなステージ、別世界にいるかのような衣装、最新技術を駆使したミュージックビデオなど、ディーヴァたちは数え切れないほどの方法で自分自身を表現しているのです。

※Express Yourselfはマドンナの楽曲名(1989年発表)。

6

スター誕生 / A STAR IS BORN

ディーヴァであるためには、卓越した才能、スタミナ、完璧さへの追求、そして人々を魅了し続けるスター性が求められ、それを維持するためには、舞台裏で働くクリエイティヴ・チームのサポートも不可欠です。様々な人々の努力の結晶でもあるディーヴァのパブリックイメージは、現代において、女性活躍の象徴からLGBTQ+およびドラァッグ・コミュニティのアイコンまで、さまざまな形式として世の中に普及しています。展覧会のフィナーレを飾るこのセクションでは、シェール（1946年生まれ）やシャーリー・バッシー（1937年生まれ）らの華やかな衣装やそれに関連する資料を紹介し、ディーヴァの圧倒的な影響力を華やかな展示によって表現します。

※A Star Is Bornは映画「スター誕生」（1937年製作、のちに3回リメイク）に由来。



エルトン・ジョンが50歳の誕生日パーティーで着用した、ルイ14世に着想を得て作られたアンサンブル、デザイン：サンディ・パウエル（1997年）
© Victoria and Albert Museum, London



第1回ロック・ミュージック・アワード（1975年）でシェールが着用したアンサンブルのデザイン画
デザイン：ボブ・マッキー

SPECIAL EXHIBITION IN JAPAN

日本展特別展示

DIVA

私を動かす、その歌声



美輪明宏

AKIHIRO MIWA

本展では、日本を代表するディーヴァとして美輪明宏（1935ー2026年）にフォーカスします。長崎市に生まれ、被ばくを経験した美輪は10代の頃より声楽を学び、高校進学を機に上京。その後、シャンソン喫茶「銀巴里」で本格的に歌手活動を開始しました。当時の男性ファッションの概念を覆すレースやサテンを用いたシャツを着用し、既存のジェンダー規範を超えた存在として自らを表現するようになりました。そして、自ら訳詞したシャンソン「メケメケ」（1957年）がヒットすると、広く世間にその名が知られるようになったのです。その後、不遇の時代を経て、炭鉱労働者に捧げた「ヨイトマケの唄」（テレビでの発表は1965年）をはじめ社会で厳しい状況に置かれている人々をテーマとした歌を手掛け、シンガー・ソング・ライターの魁として揺るぎない地位を確立しました。2018年秋には東京都より多方面での功績をたたえられ、平成30年度東京都名誉都民の顕彰を受けました。長きにわたって映画、舞台、執筆等ジャンル横断的な活動を続け、圧倒的なパフォーマンスを披露するとともに、一貫して反戦のメッセージを訴え、異性愛中心主義にもとづく差別に対して闘い続けた唯一無二のディーヴァです。

映画「黒蜥蜴」の美輪明宏（1968年）監督：深作欣二、写真提供：松竹

シスターフッド

SISTERHOOD

マリリン・モンローとエラ・フィッツジェラルド、近年では、マドンナとカイリー・ミノーグなど、本展で紹介する数多くのディーヴァたちがほかのディーヴァたちと交流を持ち、尊敬し合い、互いを勇気づけ、多くの人々に「あなたは一人でない、一緒に頑張ろう」というメッセージを発信し続けてきました。日本展の特別セクションでは、シスターフッドの思想に通じる活動、ディーヴァたちの熱きメッセージを紹介します。

THE DIVA FEATURED IN THIS EXHIBITION

本展で紹介するディーヴァ

アデル ★
Adele

マリアン・アンダーソン
Marian Anderson

アルカ
Arca

ジョーン・バエズ
Joan Baez

ジョセフィン・ベイカー
Josephine Baker

セダ・バラ ★
Theda Bara

シャーリー・バッシー ★
Shirley Bassey

イングリッド・バーグマン ★
Ingrid Bergman

サラ・ベルナール
Sarah Bernhardt

ビヨンセ
Beyoncé

ビョーク ★
Björk

リダ・ボレッリ
Lyda Borelli

クララ・ボウ ★
Clara Bow

ケイト・ブッシュ
Kate Bush

マリア・カラス ★
Maria Callas

マライア・キャリー
Mariah Carey

ドージャ・キャット ★
Doja Cat

シェール ★
Cher

プリヤンカー・チョープラー
Priyanka Chopra

エディス・クレイグ
Edith Craig

ジョーン・クロフォード ★
Joan Crawford

ベティ・デイヴィス
Bette Davis

ジョイス・ディドナート ★
Joyce DiDonato

マレーネ・ディートリヒ
Marlene Dietrich

イサドラ・ダンカン ★
Isadora Duncan

エレオノーラ・ドゥーゼ ★
Eleonora Duse

ビリー・アイリッシュ ★
Billie Eilish

ミッシー・エリオット
Missy Elliott

ファイルーズ
Fairuz

エラ・フィッツジェラルド ★
Ella Fitzgerald

アレサ・フランクリン
Aretha Franklin

ロイ・フラー
Loie Fuller

レディー・ガガ ★
Lady Gaga

グレタ・ガルボ
Greta Garbo

ジュディ・ガーランド ★
Judy Garland

デビー・ハリー ★
Debbie Harry

PJ ハーヴェイ
PJ Harvey

キャサリン・ヘプバーン
Katharine Hepburn

ローリン・ヒル
Lauryn Hill

ビリー・ホリデイ
Billie Holiday

ホイットニー・ヒューストン ★
Whitney Houston

ジャネット・ジャクソン
Janet Jackson

エルトン・ジョン ★
Elton John

グレイス・ジョーンズ ★
Grace Jones

シシエレッタ・ジョーンズ
Sissieretta Jones

ジャニス・ジョプリン
Janis Joplin

タマラ・カルサヴィナ ★
Tamara Karsavina

アーサ・キット
Eartha Kitt

ヴィヴィアン・リー ★
Vivien Leigh

アニー・レノックス
Annie Lennox

ジェニー・リンド
Jenny Lind

リゾ ★
Lizzo

マリー・ロイド
Marie Lloyd

キャロル・ロンバード ★
Carole Lombard

アイダ・ルピノ
Ida Lupino

マドンナ
Madonna

ミリアム・マケバ
Miriam Makeba

マリア・マリブラン
Maria Malibran

ラタ・マンゲーシュカル
Lata Mangeshkar

ネリー・メルバ
Nellie Melba

フレディ・マーキュリー
Freddie Mercury

ベット・ミドラー ★
Bette Midler

ライザ・ミネリ ★
Liza Minnelli

カイリー・ミノーグ
Kylie Minogue

美輪明宏
Akihiro Miwa

ジャネール・モネイ ★
Janelle Monáe

マリリン・モンロー ★
Marilyn Monroe

ジェシー・ノーマン ★
Jessye Norman

ドリー・パートン
Dolly Parton

ジュディッタ・パスタ
Giuditta Pasta

アデリーナ・パッティ
Adelina Patti

エディット・ピアフ ★
Edith Piaf

メアリー・ピックフォード
Mary Pickford

ピンク ★
P!NK

レオンティン・プライス
Leontyne Price

プリンス ★
Prince

リアーナ ★
Rihanna

ダイアナ・ロス
Diana Ross

ル・ポール
RuPaul

シャーデー ★
Sade

ニーナ・シモン
Nina Simone

スージー・スー
Siouxsie Sioux

パティ・スミス
Patti Smith

ブリトニー・スピアーズ
Britney Spears

ダスティ・スプリングフィールド
Dusty Springfield

バーブラ・ストライサンド ★
Barbra Streisand

ジョーン・サザーランド ★
Joan Sutherland

グロリア・スワンソン
Gloria Swanson

テイラー・スウィフト
Taylor Swift

エリザベス・テイラー
Elizabeth Taylor

エレン・テリー ★
Ellen Terry

ヴェスタ・ティリー
Vesta Tilley

ティナ・ターナー ★
Tina Turner

ロイス・ウェバー
Lois Weber

メイ・ウェスト
Mae West

エイミー・ワインハウス ★
Amy Winehouse

リル・ナズ・X ★
Lil Nas X

and more

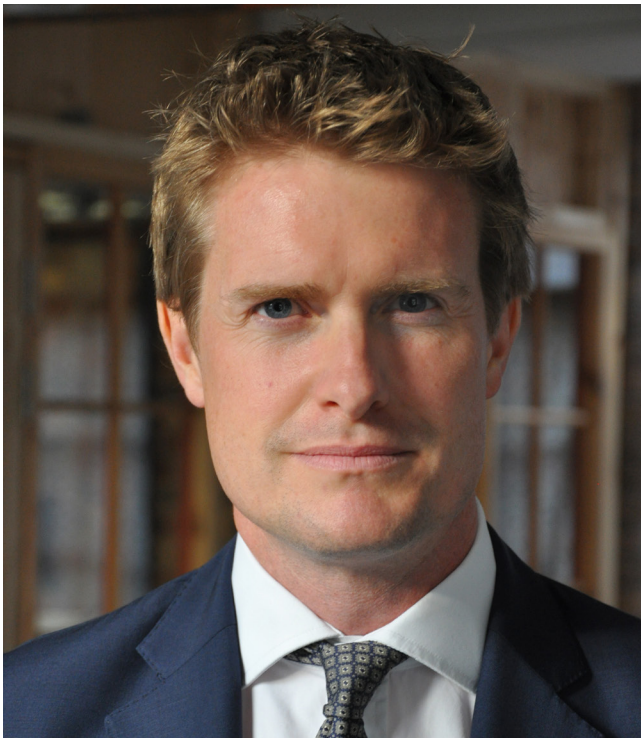
※展示作品は変わる可能性がございます。
★衣装が展示されるアーティスト

MESSAGE

メッセージ

トリストラム・ハント ヴィクトリア&アルバート博物館館長

Tristram Hunt



ラテン語で「女神」を意味する言葉をタイトルに掲げる本展は、19世紀から今日まで、自らの声を世に響かせてきたパフォーマーたちの並外れた力と創造性に注目する企画です。そしてディーヴァたちの歩みが、社会や政治にいかに変化をもたらしてきたのかを探ります。また、芸術的な卓越性を表していた「ディーヴァ」という言葉が、やがて女性を貶めるために使われるようになり、そしてパフォーマーたち自身によって新たな意味を与えられてきた、その変遷にも目を向けます。

本展の核にあるのは、声と芸術性、創造力によって、世代を超えて人々を鼓舞してきた傑出した才能への賛辞です。ジェニー・リンドからマリア・カラスへ、ジョセフィン・ベイカーからビヨンセへ、そしてマレーネ・ディートリヒからプリンス、エルトン・ジョンへ。本展は、パフォーマーたちの勇気、創意、そして表現の自由を讃えます。

世界巡回の最終地となる東京では、国立新美術館との協働により、新たな声と視点が加わりました。日本の皆さまに向けて展示の幅が広がり、今日ディーヴァであるとはどういうことなのかという問いを、より豊かに掘り下げる展示となっています。

ケイト・ベイリー ヴィクトリア&アルバート博物館 演劇・パフォーマンス部門シニア・キュレーター

Kate Bailey



今日、「ディーヴァ」という言葉には実に多様な意味があります。本展の中心にあるのは、創造性、勇気、そして野心をもって既成の価値観に挑み、自らの声と芸術を通じて「ディーヴァ」を再定義し、その言葉を自らのものとして取り戻してきた、歴史上極めて重要なパフォーマーたちの物語です。

「ディーヴァ展」を日本で開催できることを光栄に思います。国立新美術館と協働できること、そしてディーヴァをめぐるこの力強い物語が世界各地の人々に届けられていることを、大変嬉しく思っています。東京展では、日本独自の企画による展示が加わり、これまでの巡回では紹介されてこなかった素晴らしいディーヴァを迎えます。世界をつなぐこの物語に新たな視点と考えをもたらすでしょう。Viva La Diva!（ディーヴァに喝采を！）

VICTORIA AND ALBERT MUSEUM

ヴィクトリア&アルバート博物館

Created by the V&A – touring the world

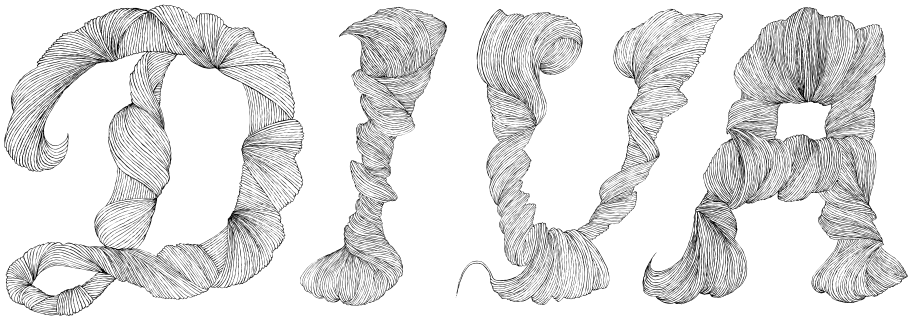


© Victoria and Albert Museum, London

V&Aは、ロンドンのサウス・ケンジントンをはじめとする5地域6施設から構成される英国の国立博物館です。1852年の創設以来、絵画や彫刻にとどまらず、ファッション、工業デザイン、建築、写真、舞台芸術など、多様な創造分野を対象としており、近年では音楽をテーマにした展覧会にも力を入れています。あらゆる形のデザインと創造性を支援・推進し、文化に関する知識を深め、世界中のクリエイターにインスピレーションを与えることをミッションとしています。展覧会、教育プログラム、デジタル体験、保存修復、研究活動、そして世界最大規模を誇る280万点以上の作品からなるナショナル・コレクションを通じて、5,000年にわたる人類の創造の物語を伝え続けています。

ABOUT THE LOGO

ロゴについて



細くしなやかな、一本の糸
幾筋もの糸が重なり合い、編み込まれ、束となる
束は力強くうねり、光を抱いて、いっそう美しく輝いていく

ロゴデザイン：田辺ヒロシ

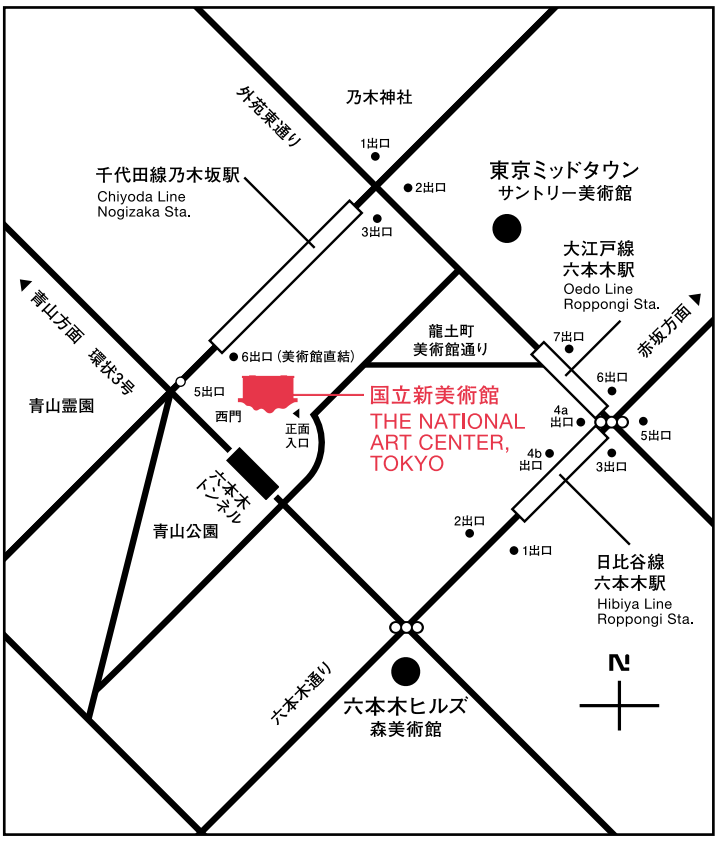
多摩美術大学グラフィックデザイン学科卒業後、ミラノのブレラ美術アカデミーで絵画と彫刻を学ぶ。1992年から2017年までニューヨークを拠点に活動し、現在は東京を拠点としている。1994年、英国版『ヴォーグ』が主催するセシル・ビートン賞でグランプリを受賞。1998年には作品集『blue mode』を刊行し、ニューヨーク・アートディレクターズクラブ（ADC）でゴールドメダルを獲得した。2021年には『blue mode』がニューヨーク近代美術館（MoMA）のコレクションに加えられた。また、V&Aにも作品5点が収蔵されている。アナ スイ、資生堂、『ニューヨーク・タイムズ』、英国版『ヴォーグ』、『ヴォーグ・パリ』、『ハーパーズ　バザー』、Gap、ナイキ、イッセイミヤケ、トヨタ、ステューシーなど、世界の主要なファッション誌やグローバルブランドのために、イラストレーションや広告キャンペーンを手がけてきた。その作品は、V&A、バレンシアガ美術館など、国内外で展示されている。

EXHIBITION INFORMATION & ACCESS

開催概要・アクセス

展覧会名	**ディーヴァ展（英：DIVA）**
会期	**2027年3月24日(水)—7月19日(月・祝)**
休館日	**毎週火曜日**　※ただし5月4日（火・祝）は開館
開館時間	**10:00〜18:00** **※毎週金・土曜日は20:00まで** ※入場は閉館の30分前まで
会場	**国立新美術館　企画展示室2E** 〒106-8558 東京都港区六本木7-22-2
主催	**国立新美術館** **ヴィクトリア&アルバート博物館** **ソニー・ミュージックエンタテインメント** **「ディーヴァ展」製作委員会**
お問い合わせ	**050-5541-8600（ハローダイヤル）**

Exhibition Title	DIVA
Exhibition Period	March 24 (Wed), 2027 – July 19 (Mon), 2027
Closed	Tuesdays　*Open on May 4
Opening Hours	10:00-18:00 *10:00-20:00 on Fridays and Saturdays *Last admission 30 minutes before closing
Venue	The National Art Center, Tokyo, Special Exhibition Gallery 2E 7-22-2 Roppongi, Minato-ku, Tokyo 106-8558, Japan
Organizer	The National Art Center, Tokyo Victoria and Albert Museum Sony Music Entertainment (Japan) Inc. DIVA Exhibition Executive Committee
Inquiries	(+81) 47−316−2772 (Hello Dial)



国立新美術館 THE NATIONAL ART CENTER, TOKYO 20TH Anniversary

https://www.nact.jp/

電車

■東京メトロ 千代田線 乃木坂駅 青山霊園方面改札6出口（美術館直結）
■東京メトロ 日比谷線 六本木駅 4a出口から徒歩約5分
■都営地下鉄大江戸線 六本木駅 7出口から徒歩約4分
バリアフリールートについては→ https://www.nact.jp/information/barrierfree/

バス

■都営バス
六本木駅前 下車徒歩約7分
青山斎場 下車徒歩約5分
■港区コミュニティバス「ちぃばす」赤坂循環ルート六本木七丁目 下車徒歩約4分
※運行系統、バス乗場については各事業者にお問い合わせください。

住所

〒106-8558 東京都港区六本木7-22-2
＊美術館には駐車場はございません。周辺にある有料駐車場をご利用ください。

展覧会公式ウェブサイト：http://diva2027.jp

@divatokyo2027

広報素材・プレスリリース配信登録

本リリースのPDFデータや本リリース掲載の広報画像（画像クレジット）をご希望の際は、以下「広報用画像申込フォーム」でお申込ください。QRコードもご利用いただけます。
また、本フォームより、ディーヴァ展に関する今後のプレスリリースや最新情報を随時メールでお届けする配信登録も受け付けています。

広報用画像申込フォーム：https://forms.gle/1LTU5vudb8z5mGiF9

本件に関する報道関係者からのお問合せ先　ディーヴァ展広報事務局　E-mail：info@diva2027.jp